

甲賀市の芭蕉句碑



原稿執筆者

まちかど特派員
小谷 柳太 (信楽町)

甲賀市には昔から松尾芭蕉を慕う風があります。芭蕉の故郷がお隣りの伊賀上野、頻りに甲賀市内を通ったこと、芭蕉自身が近江國を愛したことなどが理由だろう(芭蕉は遺言によって大津・義仲寺に葬られました)。その故か、市内各所に芭蕉句碑があります。春も間近、市内の芭蕉句碑を巡ってみましょう。

命二つの中に生きてる桜かな



▲ 大岡寺(水口町)

「野ざらし紀行」所収の一句。句碑は水口町・大岡寺境内。芭蕉42歳の貞享2年3月中旬、水口の宿に入った芭蕉に意外な訪問者がやって来ました。

「おお、君か…」

江戸で俳人として生きようとしていた芭蕉と当時10歳くらいの少年だったその訪問者との交流の詳細は分かりません。しかし、この訪問者こそ後、蕉門の中心弟子となる服部土芳でした。まさに「命二つ」が大岡寺

の桜樹の下、数年後、遭遇したのです。

木がくれて 茶摘もきくや ほととぎす



▲ 仙禅寺(信楽町)

亡くなる直前の51歳、江戸の句会で詠んだ句。句碑は信楽町上朝宮の仙禅寺に立っています。

江戸での発句がなぜ、信楽にあるのか。実はこういう例は全国に多数あります。むしろそういうケースがほとんどだそうです。句のモチーフは明らかに朝宮の茶園。地理に明るい人なら伊賀と朝宮を往復した俳人芭蕉を頭に描けるでしょう。

松茸や しらぬ木の葉が へばり付



▲ 玉桂寺(信楽町)

同じく信楽町勅旨の玉桂寺境内にあります。弟子の誰かが江戸の芭蕉庵に松茸を届けたのでしょうか。松茸の傘に木の葉や枝がへばり付いている…実感がこもっています。

さみだれに 鳴のうき巣を 見にゆかむ



▲ 常明寺(土山町)

句碑は土山町の常明寺境内。芭蕉44歳。鳩の海(琵琶湖)をこよなく愛した芭蕉。江戸の庵で五月雨の音を聞いています。おそらく琵琶湖の水位も上がっているだろうなあ。ああ、鳩の浮き巣を見に行きたいものだ。

なお、常明寺は俳僧・松堂「虚白」が延宝年間に再建。文豪森鷗外の祖父・森白仙は土山宿で客死したため、その供養塔が建立されています。

ゆくはる 行春を 淡海の人とをしみける



▲ 息障寺(甲南町)

甲賀と伊賀の県境、甲南町杉谷の息障寺参道に石標「芭蕉翁旧跡」があります。

春も終り、夏が近い。淡海の人と行春を惜しみましたよ——という程度の句。しかし、即々と迫るものがあります。これはなぜか、これが蕉風か。

なお、息障寺は古代の磐座(いわくら)信仰の拠点。岩尾山々腹にあります。

権仏や 皺手会わする 数珠の音



▲ 称名寺(甲賀町)

甲賀市滝の称名寺境内、山門をくぐると左手。石柱「圓光大師廿五拜」側面に陰刻されている(らしい)が、なにせ画数の多い漢字。私の無学か、風雨に曝された陰刻文字が明解に読めません。

因みに「権仏」——は「かんぶつ」で、所謂「花祭り」。「皺手」は「しわて」、「数珠」は「じゆず」。読みとは反対に句の著す趣は明解です。

秋やまに あら山伏の 祈ることゑ



▲ 嶺南寺(甲南町)

甲南町竜法師・嶺南寺に句碑。芭蕉が参加した連句会の一節を巖(いわお)に刻んでいます。句碑の背面には「伊賀街道龍法師邸(むら)は山伏の里」と前書きがあつて「山陰は 山伏村の ひとかまえ」の句が添えられています。

竜法師は明治維新前、「甲賀三郎」「岩尾・飯道山」「諏訪信仰」を「甲賀完業」とともに全国に流布した拠点であつたようです。

※叙述にあたっては、福井榮一氏(上野市・芭蕉研究家)、各寺院住職のご教示、乾憲雄氏の著書「淡海の芭蕉句碑」を参考にしました。